

名作コピーと短歌 加古陽

「コピーが詩人たちを青ざめさせたのはつい最近のことだった。今度は短歌がコピーライターたちにショックを与える番だ。読んでびっくりしろ」。作家の高橋源一郎がこう書いたのは一九八七年、俵万智の『サラダ記念日』の裏表紙でのことだ。〈「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日×大きければいいよ豊かなる気分東急ハンズの買い物袋」などに代表される俵万智の歌は、確かに消費を促すコピーの雰囲気の色濃くまとう。世の中にあふれる平凡なコピーの何倍も印象に残る。

逆に優れたコピー、人口に膾炙するコピーには、上質の詩や短歌、俳句に近いものがある。名だたるコピーライターがそれぞれ選りすぐりの三作品を紹介した『名作コピーの時間』(宣伝会議)という本を読みながら、なんとなくそんなことを考えた。

寺山修司の〈マツチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや〉とか北原白秋の〈君かへす朝の敷道さくさくと雪よ林檎の香のごとく降れ〉、若山牧水の〈白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まずただよふ〉、小野茂樹の〈あの夏の数かぎりなきそしてまたたつた一つの表情をせよ〉といった歌は、コピーとしても十分に役目を果たしそうだ。糸井重里の「想像力と数百円」(拳骨で読め。／乳房で読め。)(新潮文庫)、真木準の「四十歳は二度目のハタチ」(伊勢丹)、仲畑貴志の「昨日は、何時間生きて

いましたか(バルコ)、西村佳也の「何も足さない。／何も引かない」(サントリー)などは一度聞くだけで記憶に残り、それでいて詩的で、発見や驚きを与えてくれる。

では、短歌とコピーが一卵性双生児かと言えば、まったくそんなことはない。他人の空似ということはあるが、根つこのところで決定的に異なる。最大の違いは型枠があるかないか。短歌は決まった音数の型枠があるため、長ずぎることも短ずぎることも許されない。その点、コピーは一応自由である。とはいえ、メーソンのコピーはスパッと短く伝える必要があり、もしかすると短歌以上に不自由かもしれない。コピーの不自由さは、それだけでない。誰も知らない植物の名前とか、難しい漢字などは、かなり使いづらい。大衆に伝わらなくては意味がないからである。となると、どちらが自由なのだからなくなってくる。

短歌よりコピーの方が、短歌愛好者以外の大衆の記憶に残っているものが多いように見えるのは、言葉の持つ力だけでなく、コピーが文字のほか写真や映像とともに繰り返し目に触れるものだからなのだろう。街のポスターとかテレビコマーシャルで何度も流されるうちに、私たちはいつの間にかコピーの言葉を口ずさんだり、歌つたりして海馬から大脳皮質に刻んでいる。

時代の変化のスピードが速くなり、個人の好みが多様化した現代は、世代を超えてみんなが歌えるようなヒット曲も、誰もが口ずさめる短歌も、歴史に残るコピーも生まれにくい時代である。その中で、どうしたら世の中に刻印される短歌が生まれるのか。短歌とコピーの長所を併せ持ち、大衆の心を驚掴みにする「ハイブリッド短歌」にそのヒントが隠されているかもしれない。